

写-62 ライチョウの糞（見張り場）



写-63 カールに生育する高山植物

(2) 前岳から荒川小屋

前岳東斜面のカール及び登山道沿いの斜面一帯にはハクサンイチゲ、シナノキンバイ、ミヤマキンボウゲ、ミヤマダイコンソウ、クロユリ、バイケイソウ、イワベンケイ、ベニバナヒメイワカガミ、ミヤマアケボノソウ、イワノガリヤス、タカネナナカマドなどから構成される草原（お花畑）が広がっている。仙丈カールを始め南アルプスの多くのカール、お花畑にはシカが侵入した痕跡が見られるが、この地域については痕跡、被害とも殆んど見られないが、わずかな足跡と極わずかな食痕が見られる。今後、シカの密度が高くなると甚大なる被害につながる可能性もあることから要注意である。

草原を過ぎ、荒川小屋に向かって進むとダケカンバ帯になるが、この当たりからシカの出現痕跡が多く見られるようになる。小屋近づくるとダケカンバ林が出現するが、そこはシカの餌場となりディアラインが出来ているなど、シカが頻繁に利用している様子が確認される。

荒川小屋周辺のダケカンバ林は、過去の台風被害等により空間ができて草原も広がっているが、ここでの食圧は全域一定ではなく、モザイク的な食圧のかかり方をしている。このことは、シカの群れ(生息頭数)に比べ餌場となる区域が広いため食圧が適度に分散しているともいえるが、反面、今後過剰な頭数が長期間出没するようになると、深刻な植生変化が進行することも懸念される。

以上から、標高 2700～2800mより上部ではシカの出現、食害とも少なく被害ランクは D と評価されるが、荒川小屋の 2600m 付近まで下ると A～B の植生被害が認められる。



写-64 前岳東斜面のカール



写-65 カールに生育するお花畑



写-66 ウラジロナナカマド(シカ被害なし)



写-67 登山道沿いのお花畑



写-68 ダケカンバ・ハイマツ帯



写-69 ダケカンバ林(シカ被害の弱い林床にはオオバショリマが生育)



写-70 シカ被害地のダケカンバ林(小屋近く)



写-71 ダケカンバ林の遠望



写-72 草原の採食状況(モザイク状の食痕)



写-73 シカ被害の強い草原の状況



写-74 荒川小屋下部のシカ道

4 赤石岳周辺地域（荒川小屋から百間洞山の家）

大聖寺平、北沢カール、百間平付近のシカの被害状況を把握すべく荒川小屋から百間洞の間の登山道沿いを踏査した。

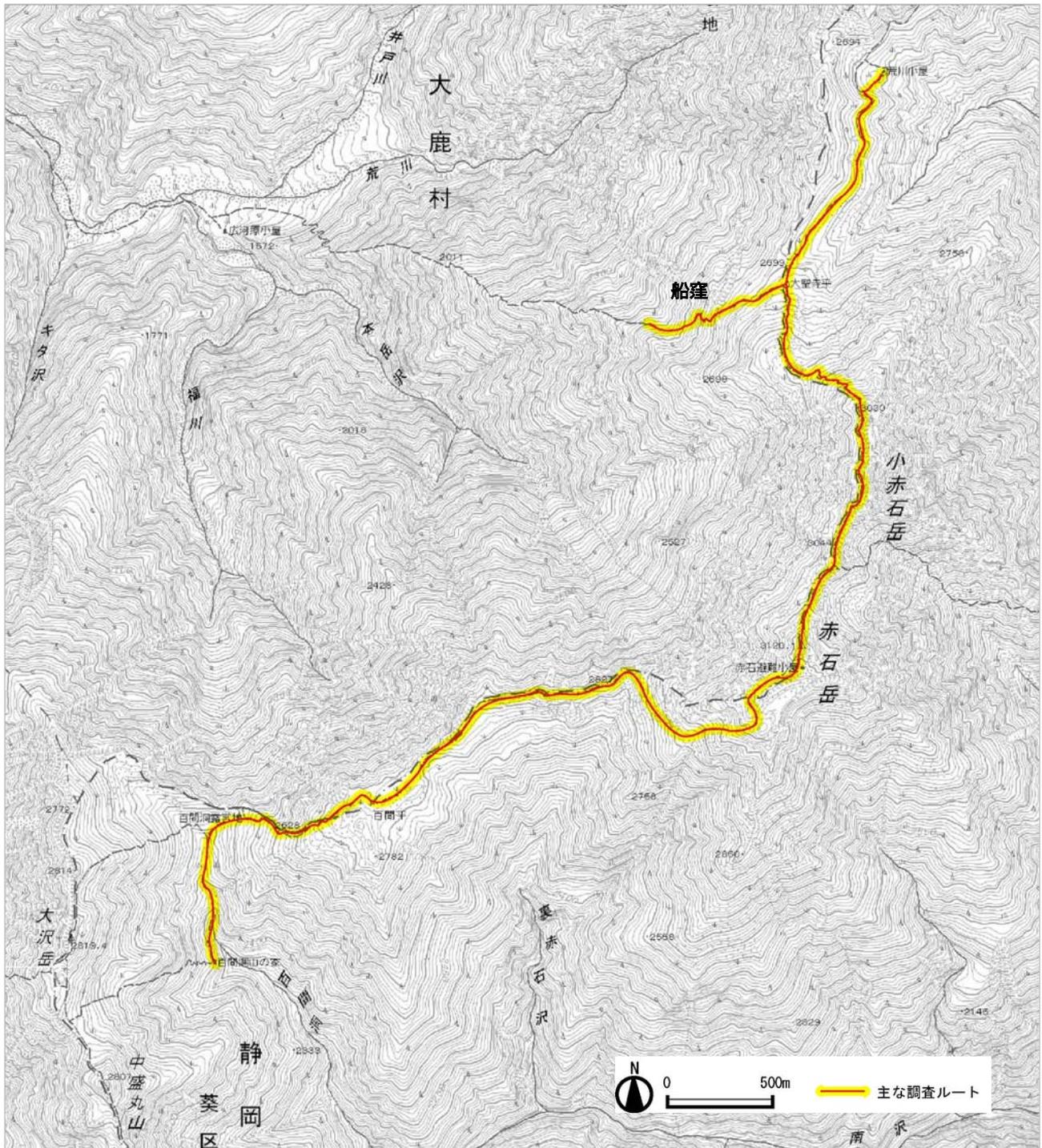


図-7 調査位置図 4(荒川小屋から百間洞山の家)

(1) 荒川小屋から大聖寺平、舟窪

荒川小屋から大聖寺平の間は、ダケカンバ、シラビソの林を抜けるとハイマツ帯へと出る。この間、登山道脇のタカネナナカマドやツツジ類の低木にシカの食痕、足跡が確認される。

大聖寺平には、小渋川に下る登山道と赤石岳に向かう登山道の分岐があり、小渋川コースを舟窪まで踏査した。ハイマツ帯を過ぎるとダケカンバ、シラビソ林に変わる。登山道沿いの低木には、シカによる古い食害痕が見られたが、新しい食痕は殆んど確認されず低木層は発達した状況にある。なお、大聖寺平付近においてハイマツにシカの噛み跡を確認したが、周辺に同様の痕跡は見られなかった。

このような現状から、荒川小屋から大聖寺平に至る間の被害ランクを B、大聖寺平及び大聖寺平から舟窪の間は C ランクとした。



写-75 荒川小屋方向から大聖寺平に至る登山道



写-76 シラビソ林況（舟窪に向かう途中）



写-77 大聖寺平で確認したシカの足跡



写-78 大聖寺平付近のハイマツへの噛み跡



写-79 大聖寺平の登山道分岐

(2) 小赤石岳、赤石岳、馬ノ背

大聖寺平から小赤石岳、赤石岳、馬ノ背の間は標高 2800m以上の高山帯地域であり餌となる植物も少なくシカの植生被害は殆んど見られない。ただ、登山道沿いの何箇所かに足跡が確認されたが、単独行動の足跡でありシカの足跡か、カモシカの足跡かは不明である。また、小赤石岳と赤石岳の間にある北沢カールにも明瞭なシカ道は確認されなかった。

このため、被害度ランクは D とした。

なお、赤石岳山頂付近には以前カモシカが確認されていたとの情報を得たほか、馬ノ背に下る途中ではライチョウの羽を見つけることができた。



写-80 稜線に広がる草原(お花畑)



写-81 左同 お花畑の様子



写-82 北沢カール



写-83 チングルマとチシマヒカゲノカズラ



写-84 赤石岳避難小屋より山頂を望む



写-85 ライチョウの羽毛

(3) 馬ノ背から百間平、百間洞山の家

ハイマツ帯の馬ノ背を過ぎると亀甲状土が形成されている百間平の草原が広がる。ここは、以前からシカが餌場として利用していたらしく草丈の低いヒメスゲ、ミツバオウレンが優先し、その中にオヤマリンドウ、バイケイソウが散在するシカの被害跡地に見られるが草原へと変貌している。また、登山道沿いには、シカの足跡が確認されるほか、草原とハイマツの境にはシカの糞が多く確認されシカの活動地域となっているものと推測される。

百間平を過ぎ急坂に入ると百間洞山の家が見えてくる。百間洞一帯はダケカンバ林が優占し、疎林状の地区も多く混在し草原状の相観が広がっている。特に、ダケカンバの疎林や草原地帯ではシカが利用した形跡が多く見られるが、山の家やキャンプ場周辺で人の出入りする周辺では草丈が比較的高く今年の状況を見る限りあまり食害は感じられない。しかし、山の家から死角となる地域では、林床植生の食圧が高く、明瞭なシカ道が沢山あり、全般に草丈が低いなどシカの被害が見て取れる。

以上から、今年のシカ被害は少ないと見られるが、以前からシカの被害が続いていると推測される。このため、この間の被害ランクは場所によってA～Bとした。

なお、今後食害が広がるかどうか観察する目的で、キャンプ場周辺等の草原を対象に定点写真を撮影した。この結果、キャンプ場、山の家等施設周辺では被害は生じていないと見られたが、人の目から外れた場所では被害が発生している様子が確認された(写-90)。



写-86 ダケカンバ林の状況 (1)



写-87 ダケカンバ林の状況 (2)



写-88 キャンプ場周辺の状況 (定点1)



写-89 山を家の背後の状況 (定点2)



写-90 シカの被害の強い状況 (定点 3)



写-91 採食痕 (ユキザサの茎部)

定点 1



8/1

定点 2



定点 3



8/29



9/23



写-92 定点写真 (左から定点 1、2、3 及び、上から 8/1、8/29、9/23 撮影)

上記写真の左列は、キャンプ場に接した斜面の草地で、7月26日の現地調査(写-86)の後8月1日、8月29日、9月23日に撮影したもので、シカの被害は殆んど見られない。中央列は、山の家裏の斜面で、8月29日には花の咲いている状況が見られるなど定点1同様シカの被害は感じられない。右列は、過去に最もシカ被害が激しかったと見られる区域で、8月29日の時点で食痕やシカ道の形成が認められる。また、9月23日の写真は、他の地点に比べ明らかに草丈の成長が見られない状況が読み取れる。

5 大沢岳、兎岳、聖岳周辺地域（百間洞山の家から聖平小屋）

大沢岳、中盛丸山、兎岳、前聖岳と続く稜線の登山道を中心に調査した。

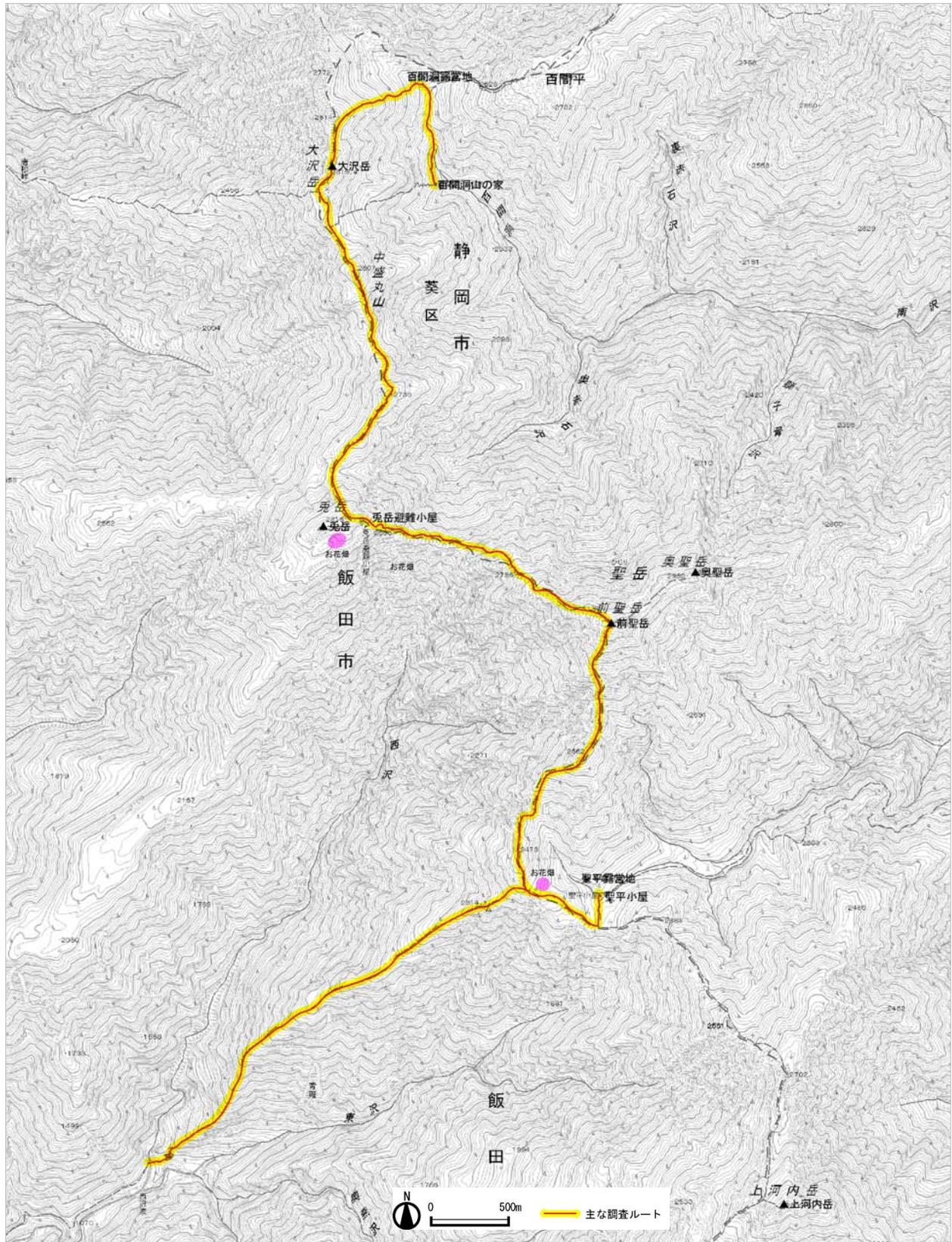


図-8 調査位置図 5(百間洞山の家から聖平小屋)

(1) 大沢岳から兎岳

大沢岳には、百間洞のダケカンバ帯を過ぎハイマツ帯を通過して大沢岳北側の鞍部に辿り着き、ここから稜線に沿って到達する。ダケカンバ林を通過する間にはシカの低木類に古い食痕が多々確認されたが、ハイマツ林に変わるとシカの食害は見られない。なお、稜線では、ライチョウの羽や砂浴びした跡が確認された。

大沢岳から兎岳へは、主稜線を縦断するルートで、途中、中盛丸山、小兎岳を通過するため上り下りが激しい。それぞれの鞍部近くには、谷に沿ってダケカンバ林が上がってきており、そこではシカの出現形跡が確認された。形跡は、低木への古い食痕、シカ道、足跡であるが最近の植生被害は殆んど確認されなかった。

なお、登山道から外れた中盛丸山の南東に広がる広大なダケカンバ林の下層にはシカの被害が確認されたほか、小兎岳と兎岳の鞍部にある水場の沢一帯に広がる草地にも被害が確認された(写-103、104)。

このため、登山道沿いでダケカンバ林と接する場所では、シカの形跡が容易に確認できることから被害度ランク B、その他の地域は C~D とし、登山道から外れて草原が広がる地域では被害度 A とした。



写-93 ハイマツ帯より大沢岳を望む



写-94 ライチョウの砂浴び跡



写-95 大沢岳より中盛丸山、兎岳を望む



写-96 大沢岳から長野県側を望む



写-97 大沢岳より百間洞を望む



写-98 食害のない鞍部近くの草原



写-99 登山道沿いで散見されたシカの足跡



写-100 鞍部に達したダケカンバ林の状況



写-101 兎岳の全貌（ダケカンバがハイマツ帯まで上がっている。）



写-102 左同 ダケカンバ林の拡大



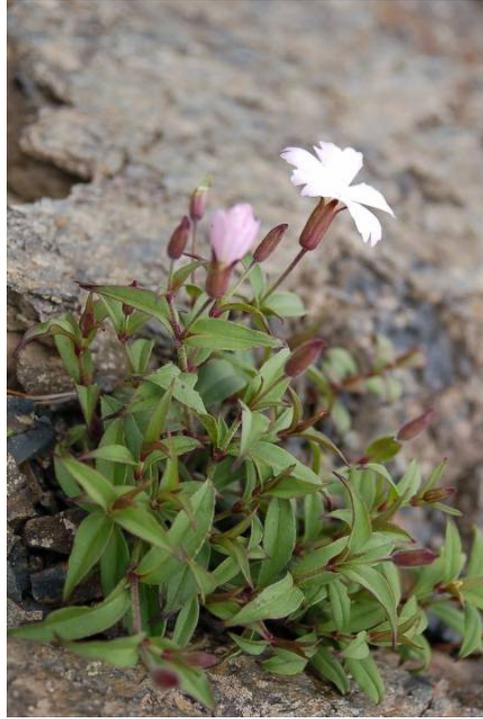
写-103 中盛丸山南面のダケカンバ林の被害地



写-104 小兎岳直下の水場の沢の被害地



写-105 ライチョウを目撃した兔岳直下の平地



写-106 兔岳山頂のタカネビランジ

(2) 兎岳から聖岳、聖平小屋

兎岳避難小屋周辺では、草本にシカの食痕、タカネナナカマドなどの低木に食害痕が見られた。兎岳と聖岳の鞍部付近はダケカンバ林が成林しており、その林床には明瞭なシカ道がありシカの生息痕が確認される。ダケカンバ帯を過ぎるとシカの痕跡も少なくなる。

前聖岳山頂から南方に急斜面を下り、ハイマツ帯になるとシカの足跡が散見されるようになる。足跡は小聖岳付近から密度が高くなり、小聖岳過ぎるとダケカンバ、シラビソ林となりシカの餌場となる草原も出現する。そこでは、刈り込まれたような採食地や強度の食圧により植生が変わったと推測されるマルバダケブキやバイケイソウの優占する単純な草原が見られる。さらに進むと薊畑となる。薊畑から聖平の間は大規模な草原が広がるが、その殆んどがシカの食害にあっており、一見牧草地状態の様相を呈している。10 年程前はニッコウキスゲの咲く草原であったとされるが、現在はシカ柵を設置して保護されているところで見られるだけで、ほぼ壊滅状態にある。このため、静岡県では 5 年程前から前述の柵の設置を始めとする植生復元活動が進められている。

以上から、この間の被害ランクは兎岳避難小屋周辺や聖岳との鞍部周辺で B、ハイマツ帯から山頂、小聖岳付近までは D ランク、小聖岳付近から薊畑が B、薊畑から聖平にかけては A ランクとした。特に、薊畑から聖平の被害は顕著で、これまでの食害により本来の高茎草本群落とは相観の全く異なる植物群落に変貌(写-2、3)しており、その状態が現在でも続いているのは今でも相応のシカの食圧を受けているためと考えられる。



写-107 兎岳避難小屋周辺に食害がある



写-108 兎岳と聖岳の鞍部付近のダケカンバ林



写-109 ダケカンバ林の状況



写-110 前聖と奥聖の稜線



写-111 前聖岳の南面で確認した足跡



写-112 小聖岳を下った所のダケカンパ林



写-113 シカの採食跡



写-114 植生が変貌した単純な草原



写-115 薊畑の草原



写-116 薊畑のシカ柵設置箇所の状況



写-117 聖平の草原



写-118 聖平のシカ柵設置箇所の状況
(ニコウキスゲが開花)

【シカ柵設置箇所の状況】

シカ柵は、静岡県によって薊畑に 10m×10m1 箇所、聖平に 10m×10m1 箇所を平成 14 年に設置し今年 5 年目である。

シカ柵の効果は、現地写真に見られるよう柵の内外で植生の生育状況が全く異なっていることから判然としていた。設置して 3 年目ころからシカの食害前の植生状態に戻りつつあると報告されているが、5 年経過したこの状況は被害前に近い植生に戻ったものと推察される。これは、この地域がシカの食害を引き続き受けていることの証明でもある。

なお、平成 19 年度には聖平に 20m×20mのシカ柵 1 箇所を新たに設置している。



写-119 薊畑の草原(柵外)



写-120 薊畑のシカ柵内(イブキトラノウが目立つ)



写-121 薊畑の草原(柵外)



写-122 薊畑のシカ柵内



写-123 聖平のシカ柵内 (写-118 参照)



写-124 聖平のシカ柵内(ニッコウキスゲ)

(3) 薊畑の分岐から西沢渡

薊畑からの分岐付近では、シカ道が各所に見られ、この踏み荒しを起因とする荒廃の拡大が危惧される（写-125）。

薊畑の分岐から西沢渡に向け尾根沿いの登山道を下ると、標高 2400～2200m位のシラビソ林内では、更新樹となる稚樹の幹にシカの剥皮痕が若干見られら。多くは古い痕跡で、新しい剥皮痕は少ない。

森林被害としては、シカよりクマによる被害が深刻である。クマの剥皮は、標高 2000m付近まで続いており昨年以前の被害木もあるが、今年の被害木が目立って多く見られた。昨年剥いだ木の反対側を剥ぎ取り巻き枯らし状態になるものもある。なお、保護林は標高 1900m付近まで設定されているため、クマの被害地とはほぼ重なってる。

以上から、このコース沿いの被害ランクは、シカについては C と判断されるが、クマの被害については局所的に B ランクに相当する。なお、保護林区域から外れる標高 1900m以下についてのシカ被害は古い食痕が確認されることから C とした。



写-125 荒廃原因となるシカの踏み荒し(薊畑)



写-126 後継樹(稚樹)の食害(シカ)



写-127 クマの皮剥ぎ被害



写-128 集中している被害木